



21世紀 COE プログラム

「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」がスタート

このたび東南アジア研究センターは、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科とともに、文部科学省の21世紀COEプログラムによる研究教育拠点に選定された。

重点領域研究、中核的研究拠点(COE)形成プログラムに引き続き、年度途中であるが、2002年度から、「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成——フィールド・ステーションを活用した教育・研究体制の推進」のプログラム名称の下で、新たな大型プログラムが開始するはこびとなったわけである。大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・科長の加藤剛教授を研究リーダーとする5カ年計画(2002～06年度)である。本計画の目的と概要は、以下のとおりである。

本計画は、「地球・地域・人間の共生」という統一テーマを設定し、その下でフィールド・ステーションの設置、「アジア・アフリカ地域研究統合情報化センター」の設置と充実化、「ネットワーク型地域研究機構」の設立という3つの研究教育体制の整備を行い、これらを有機的に結びつけ、研究・教育の効率的推進を行おうとするものである。

フィールド・ステーションは、既存の海外調査プロジェクトの拠点、MOU(国際学術交流協定)の締結を済ませた海外の大学・研究機関などを核に、ジャカルタおよびバンコクの東南アジア研究センター連絡事務所との緊密な連携を確保しつつ、アジア・アフリカ各地に臨地研究・臨地教育の基地となるフィールド・ステーションを設け、現場でのインテンシブな共同研究と大学院教育の実施体制を整えようとするものである。フィールド・ステーションは「機関型」と「機動型」に大別されるが、特に前者の「機関型」では、若手研究者を採用して長期派遣し、現地語図書・政府刊行物など資料情報の系統的収集、相手国の研究教育機関との国際共同研究の推進やワークショップの開催、さらには複数のフィールド・ステーションを横断する研究・教育活動も実施することになる。

次に、東南アジア研究センターと大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の既存の図書室機能を統合・発展させ、「アジア・アフリカ地域研究統合情報化センター」(2003

年度に学内措置で設置計画中)を設置、それを充実化していく。資料情報の収集のみならず、多言語環境のもとでの情報整備、情報発信機能の重点化などをねらいとするものである。

また、この「アジア・アフリカ地域研究統合情報化センター」を中核として、国内外の地域研究・教育機関、東南アジア研究センターのバンコクおよびジャカルタ連絡事務所、フィールド・ステーションなどをネットワークで結ぶという計画が、「ネットワーク型地域研究機構」設立の具体的な内容である。

以上のような研究・教育推進のための3つのいわば装置を通じて、統一テーマ「地球・地域・人間の共生」の下で、人間生態問題群、政治経済問題群、社会文化問題群、地域研究論問題群の4つの問題群に大別されるより具体的な研究テーマを立て、文理融合的・学際的な地域研究のより一層の組織化・高度化とそれへの大学院生の参加を促し、アジアにあって世界を先導する地域研究の研究教育拠点を確立しようとする意欲的な内容となっている。

(文責：藤田幸一)

その他の主な内容

COE 国際会議「グローバル化と地域形成」開催	… (2)
東風南信	… (3)
人事	… (4)
COE だより・	
<i>Kyoto Review of Southeast Asia</i>	… (5)
東南アジアセミナー	… (6～7)
『地域研究のあゆみ——センター35年史』刊行・	
出版ニュース	… (8～9)
Colloquium	… (10)
Fieldnotes	… (11)
Visitors' Views	… (12～18)
研究会報告	… (19)
連絡事務所だより	… (20)

COE 国際会議 「グローバル化と地域形成」開催

2002年10月25日より3日間にわたり、国際会議「グローバル化と地域形成」が、文部科学省科学研究費中核的研究拠点形成（COE）プログラム「アジア・アフリカにおける地域編成——原型・変容・転成」の助成のもとで、京都大学東南アジア研究センターおよび大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の主催によりキャンパスプラザ京都で開催された。全233名の参加者のもと、イマニュエル・ウォーラステイン氏による特別講演（http://coe.asafas.kyoto-u.ac.jp/news/coe_sympo/top_jp.htmlに全文掲載）および以下の3つのセッションを中心に、グローバル化の進行に対する地域研究によるアプローチ、地域間比較研究による地域横断的な課題が検討された。

セッション1「農業開発再考：地域から見るグローバル化」では、新しい農業と農村の開発のあり方を考える上で、地域研究の成果がどのような貢献を果たしうるかが検討された。林幸博（日本大学）、ヴィクター・マンヨン（国際熱帯農業研究所）、テリー・ランボー（センター）、高根努（日本貿易振興会アジア経済研究所）が発表を行い、経済のグローバル化と思想的背景を共有してきた農業開発ならびに農村開発を再考する作業を通して、地域から見る新しいグローバル化の動態が議論された。

セッション2「グローバル化状況における日常実践の変容」では、グローバル化のもとでの人々の宗教・エスニティ・ジェンダー等に関わる日常実践の変容がとりあげられ、人々のアイデンティティ、ミクロレベルの社会秩序を形成する慣習実践とグローバル化の関係が検討された。トーマス・ハンセン（エジンバラ大学）、レイ・ジョンソン（アリゾナ州立大学）、松田素二（京都大学）、大塚和夫（東京都立大学）、アイワ・オン（カリフォルニア大学バークレー校）は、南アフリカ、タイ、ケニヤ、シンガポールなどから変貌する日常実践の事例を呈示しながら、グローバル化がマクロレベルの生活世界のありかたといかに関わっているのかの考察を行った。

セッション3「地域と国家」においては、グローバル化が国家に与えるストレス要因が検討された。メアリー・キャラハン（ワシントン大学）、遠藤貢（東京大学）、レティティア・ローソン（海軍大学院大学）、アmena・モシン（ダッカ大学）、アチン・ヴァナイク（ジャミア・ミリア・イスラミア大学）の議論は、グローバル化のもとでの変化に国家がどのように対応することが要請されているのか、そのためには国家はいかなる能力を必要としているのかを中心に展開された。

最終日の午後には、白石隆、パトリシオ・アビナウレス、小杉泰、島田周平、田辺明生、田中耕司（以上、京都大学）、原洋之介（東京大学）による総合討論が行われた。

（文責：石川 登）

講演中のイマニュエル・ウォーラステイン氏



セッション2「グローバル化状況における日常実践の変容」でディスカッションに臨む発表者たち

カレン族と過ごした日々

飯島 茂



カレン族の少女ノブポを知ったのは、もう四昔も前のことである。フィールド・ワークの第一年目は、山村における食生活がたたったのか、わたくしは夜盲症になってしまった。そのことを心配して、第二年目には、妻が生まれたばかりの娘を実家の母にあずけて、泰緬国境の村にやって来てくれた。村でカレン織りを習う

のに、ノブポの母親に指南を頼んだのが、彼女を知るきっかけとなった。母親がわが家に来る時は、必ず、ノブポも付いて来て、わが家で過ごしていた。色白で、目鼻立ちも整っているなかなかの美少女であったが、栄養が良くないせいか、いかにもやせ細っていた。

しばらくして、われわれが大部親しくなったある日のこと、ノブポの母親は妻に、夫が病気で働けないので、娘にお米の御飯を十分に食べさせられないと、涙ながらにうったえたという。初子である娘を実家にあずけてきたばかりの妻は、母性があり余っていたのであろう。言下に「日中は家によこして、食事はわれわれといっしょにするから……」という、ノブポも母親も大喜びであったという。

次の日の朝、ノブポは1キロもある道を遠しとせず、いそいそとやって来た。貧しいカレン族の家で育った彼女には、われわれのごく普通の食事でも、三度三度腹いっぱい

食べられるのがよほど嬉しかったのだろう。日に日にぼっさりとしてきて、血色も良くなる。妻もノブポを娘のように可愛がり、日本人風に髪をおかっぱ刈りにしたり、市場に連れて行き、服なども買っていたようである。

やがてフィールド・ワークも終わり、ノブポと妻は涙の別れになる。それから20年ほど経ったある日、朝日新聞社のバンコク支局から、一通の手紙が届いた。差し出し人を見ると、宇佐波雄策さんからである。京大文学部の卒業生で、若い頃から親しくしていただいた人である。手紙の封を切ると、まず目についたのは一葉の写真であった。赤ちゃんを抱いた若いカレン族の女性の顔には、どこか見覚えがあった。すぐに、「ノブポだ！」といっなくなると弾んだ声をたてたのは妻であった。さすがは“義理のお母さん”、20年の歳月を経ても記憶は確かなものである。

手紙によると、宇佐波さんがわれわれのフィールド近くのメサリアンの市場で取材をしていると、カレン族の女性から「日本人ですか」と声をかけられ、「もしや、マサコー（妻のこと）かイイジマー（わたくしのこと）を知りませんか」と尋ねられたという。20年経っても、ノブポはわれわれのことを覚えていてくれたのである。フィールドの古き良き思い出を蘇らせてくれた宇佐波さんの友情に感謝するとともに、素朴な自然児たちと生活を共にすることのできた幸せを、妻と子ども、それから何回も何回も反芻したのである。

（1965～1967東南アジア研究センター助手。東京工業大学名誉教授。）

東風南信 REFLECTIONS

タムノップとバライ

福井 捷朗



2000年3月にセンターを退職して以降の近況を、この機会に簡単に報告させていただきます。センター在職中からの研究の延長ですが、ひとつは土堰灌漑のこと、もうひとつはアンコールのバライに関することです。

天水田地帯と知られている東北タイでも、20世紀前半までは灌漑稲作が卓越していたことはすでに報告いたしました。その灌漑方式は、小河川に両岸より高く土堰を築き、河川流の全量を川沿いの水田に掛け流しするもので、タムノップ灌漑と呼ばれるものです。その後も何度か現地を訪ねたり、カンボジア、ラオス、ミャンマーにも足を伸ばし、同じようなものがないかを調べています。カンボジアには、タムノップがクメール語であることから予想されたように、多くのタムノップが現役で使われています。ミャンマーでも類似の工夫が見られました。これまでのところ、稲作期間中の降雨量が1,000mm前後で補助灌漑の効果が大きな気候条件において、石材が入り手困難な場合に、土砂や草木を使ってさまざまな工夫が行われてきており、その1種がタムノップであると総括できそうです。つまり石材がないため、過剰の河川流を堰の上を越流させたり、余水吐を通じて流すことができない場合の工夫といえます。この種の工夫は、

現在ではまったく忘れられた形態です。そのようなものに注目することが、もしかしたら通常の溜池灌漑や井堰灌漑とは異なったきわめて独創的な灌漑システムを考えるきっかけになるかもしれないと期待しています。

アンコールの巨大貯水池バライが水田灌漑のためであるとするアンコール水利社会説は、アンコール研究者の間で一般的でした。しかし、1980年の van Liere の否定的見解以来、水利社会説に疑問を呈する人が増えてきています。バライに取水口が見当たらないことが見解を左右する最大の理由です。見当たらないのは、まだ見つかっていないだけという見方もありますが、スリランカやミャンマーの貯水池に見られるように、圧力がかかった水を取水する工夫はかなり大掛かりなものが必要で、もしそのようなものがバライにもあるなら、見つかっているはずであると私は思っています。アンコールには排水トンネルや深い石造井戸がありますから、技術的な未熟さゆえに取水口がないとは考えにくいことです。バライが灌漑用でないとなると、王権の農業生産への直接関与が否定されることとなります。それはそうだとすると、気になるのは、それではアンコール時代の稲作はどうであったか、ということです。となると、東南アジア古代文明の立地がおしなべて乾季の厳しい高燥の地であったことに鑑み、モンスーンアジア全体の稲作の立地の遷移と生産技術の関連という問題になります。

（1974～2000東南アジア研究センター助手・助教授・教授。現在立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部教授。）

人 事

教官人事

<昇任>

林 行夫社会文化相関研究部門助教授は2002年10月1日付け、教授に昇任。

外国人研究者人事

■外国人研究員



・Charles J-H Macdonald (フランス)。プロヴァンス大学フランス国立科学研究センター研究員・太平洋アジア研究所長。招へい期間2002年5月13日～11月12日。研究題目「南ベトナムのラングライ人に関する社会人類学的研究」



・Neil L. Jamieson (アメリカ合衆国)。イースト・ウェストセンターコンサルタント。招へい期間2002年6月1日～2003年5月31日。研究題目「ベトナムにおける社会組織と人間生態学の研究」



・Tsu Yun Hui Timothy (イギリス)。国立シンガポール大学助教授。招へい期間2002年7月16日～2003年1月15日。研究題目「東南アジアにおける日本の中国人観及びその他の民族観、1850-1946」



・Tran Duc Vien (ベトナム)。ハノイ農業大学農業・環境科学研究センター長。招へい期間2002年7月22日～2003年1月21日。研究題目「ベトナム北部地域における文化と営農体系の関係」



・Sumit Kumar Mandal (マレーシア)。マレーシア国民大学マレーシア・国際問題研究所講師。招へい期間2002年10月22日～2003年4月21日。研究題目「アラブ人の歴史からマレー世界の多様性を考える」



・Chantanee Panishpon (タイ)。タマサート大学プエイ・ウンパコン図書館司書。招へい期間2002年10月22日～2003年4月28日。研究題目「レファレンスサービス及び情報検索(インターネット・サーチ)」

■招へい外国人学者

・Sugiah M. Mugniesyah (インドネシア)。ボゴール農科大学講師・女性センター所長。2002年5月11日～7月10日。「ジェンダー、貧困及び世帯戦略——西ジャワにおける持続的農業発展に関する事例研究」

・U Boon Thein (ミャンマー)。ミャンマー連邦農業灌漑省課長。7月30日～8月3日。「JICA カウンターパート研修の補完研修」

・Shandre Mugan Thangavelu (シンガポール)。国立シンガポール大学助教授。8月1日～10月17日。「日本の高齢化と生産性についての研究」

・Mohamad Haji Salleh (マレーシア)。マレーシア国民大学教授。10月1日～31日。「過去と新世紀のための文学の役割と機能——マレーシア、インドネシア及び日本の比較研究」

・Hasballah Muhammad Saad (インドネシア)。ジャカルタ国立大学教授。10月5日～25日。「中産階級の研究」

・Ukrist Pathamanand (タイ)。チュラロンコン大学助教授。10月14日～27日。「中産階級の研究」

・I Ketut Ardhana (インドネシア)。LIPI 地域資源研究センター東南アジア研究部門長。10月10日～11月24日。「日本における観光産業の発展に関する研究」

■外国人共同研究者

・孔建助 (中国)。中国雲南省社会科学院東南アジア研究所講師。10月1日～2003年9月30日。「日本とアメリカの東南アジア政策に関する研究」

『東南アジア研究』が電子化

東南アジア研究センターでは、センター・ホームページ (<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>) 上で季刊学術誌『東南アジア研究』を電子的な複製 (PDF ファイル) として提供することになりました。最新号より適宜的に作成していますので、現在提供できるものは26巻までですが、将来は創刊号まで提供することを計画しています。

掲載論文の著作権は東南アジア研究センターに所属していますが、学術目的で、かつ個人的に利用する場合に限って、その全部または一部を自由に参照・複製・印刷することができます。

一度センターホームページを覗いてみてください。

1998年度に開始された COE プロジェクト（特別推進研究）「アジア・アフリカにおける地域編成——原型・変容・転成」は最終年度を迎えています。この5年間で総額8億5千万円の研究助成をいただきました。この間、東南アジア研究センターと大学院アジア・アフリカ地域研究研究科は、コンピュータネットワークなどの基盤整備に始まり、図書・マイクロ資料や地図・画像資料の購入、整理、加工などの研究支援、ワークショップやシンポジウムの開催などの研究交流、学術ネットワーク形成、そして *Kyoto Review of Southeast Asia* (e-journal) などの学術情報の発信を共同して推進してきました。さらに5年間の研究成果を広く知ってもらうために、2003年度には「風土のアジア」（東南アジア生態系）、「アフリカの力」（いずれも仮タイトル）、平成16年度には東南アジア人文社会系、西・南アジア、地域間比較の研究成果をまとめた合計5冊の和書を出版すべく準備を進めています。

COE プロジェクトを少し別の角度から眺めてみると、それは私たちがやっている研究、やろうとしている研究の国際化と学際化と地域間比較、すなわち広い意味での

globalization を目指したものである、と要約することができます。このうち国際化についてはこの5年間で大きな進歩があったといえるでしょう。"Area Studies: Past Experiences and Future Visions" (2000年度)、"Regions in Globalization" (2002年度) など、学問分野横断的な国際会議を数多く主催し、アジア、アフリカ、欧米諸国の第一線で活躍しているさまざまな研究者との交流を深めました。しかし学際化と地域間比較については、いろいろな試みをしてきましたが、まだまだ課題を残したままこの5年間を終えなければならないようです。それぞれの学問分野には特有の言語があるように、それぞれの地域には特有の感覚があります。この言語と感覚を乗り越えて、異なる分野や地域を対象とする研究者が議論を深める共通の土俵を作っていくのはそう容易なことではありません。とはいえ、Never give up です。この COE プロジェクトに引き続いて21世紀 COE プロジェクトも始めました。地域研究の真の globalization へ、一步一步、着実に前進していると確信しています。

(文責：河野泰之)

Kyoto Review of Southeast Asia: Disaster and Rehabilitation

The second issue of CSEAS's online review focuses on tropical environment management, including articles by academics and practitioners with experience in central governments, international NGOs, and on the local level. Their contributions point to the start of a new era in tropical environment management, in which rehabilitation will be key.

The preceding eras of colonial rule and development-driven postcolonial government have brought world-wide environmental disaster. Colonial governments pioneered the destruction of tropical rain forests in favor of commercial crops and plantation agriculture on the most favorable land. Postcolonial governments, needing quick income for the development of new nations, took advantage of easy access to their richest resources—the timber of tropical rain forests.

Destruction intensified in the period from 1980 to 2000. The first big forest fires occurred in Indonesia in 1983, and many were later set deliberately to clear land for large plantations. These fires have affected all the surrounding countries and

become a critical regional issue. Peat swamp forests and mangroves have been similarly mismanaged. Shrimp farming throughout the coastal areas of Southeast Asia has left toxic and abandoned ponds in its wake. Clearly, a new type of environmental management is called for.

In the last 10 years, worldwide movements have emerged focusing on the human rights of forest dwellers. These point the way to a new approach to environmental management. The concurrence of these movements with ongoing environmental disasters has given new power to NPO and NGO groups pushing political and international organizations toward more sustainable development policies, reforestation, and community resource management.

This is an urgent issue, and we should start by pursuing knowledge about the way of life of local people who live in daily contact with the environment. They can give a good example of how to make the tropical environment harmonious and sustainable.

(Reported by Yamada Isamu)

第26回東南アジアセミナー

「東南アジアにおける“生・老・病・死”—— フィールドワークの現場から」

第26回東南アジアセミナーは「東南アジアにおける“生・老・病・死”——フィールドワークの現場から」と題して、受講者21名の参加を得て9月9日から13日まで開催された。今回は、主として医学、細菌学、公衆衛生学、老年医学、人間生態学の立場から東南アジアの人々の実態をとらえてみたいというのが開催委員の趣旨であった。

東南アジアでは欧米諸国がすでに克服し去った感染症がいまだに重大な問題として残されている。そこで前半では東南アジアで問題となるマラリアや結核などの感染症の実態を論じた。一方、東南アジアでも、少子高齢化はかつての欧米諸国以上のスピードで進行している。東南アジア各国も、きたるべき高齢社会にむけての医学的対応に迫られている。さらに、保健福祉にふりむけられる財政は豊かではない。東南アジアの保健福祉問題は、「感染症」「高齢化」「乏しい財源」という "triple burden" をかかえている。そこでセミナー後半では、東南アジアにおける人間生態学的視点からのさまざまな問題点と人口問題を論じた。また東南アジア地域におけるフィールド医学的知見とともに、農村開発にともなう諸種の健康問題や民間に継承されている伝承薬、高齢者に対する伝統的ケアシステムについても紹介した。最後は、東南アジア農村部の人々の暮らしを生態系とのかかわりのなかで総括してセミナーを終了した。ご講演いただいた講師の方とテーマは下記のごとくである。

上原鳴夫（東北大）「人々はどのように死んでいるか——アンチョールの死亡事例から学ぶこと」▽川端真人（神戸大）「東南アジアにみる感染症の課題」▽西淵光昭

「東南アジアでの感染症調査こぼれ話」▽石井明（自治医大）「マラリア対策のための調査——ソロモン群島とインドネシアにおける経験談」▽下内昭（大阪市）「東南アジアの結核および小児肺炎」▽A. テリー・ランボー「人間生態学からみた病気」▽松林公蔵「東南アジアとフィールド医学」▽五十嵐忠孝「高出生力とその変化——ジャワ・バリを中心に」▽安藤和雄「人はどこまで環境を改変できるのか？——健康からみた農村開発・農業発展の光と影：バングラデッシュの事例を中心に」▽新田あや（京都大）「インドネシアの伝承薬」▽馬場雄司（三重県立看護大）「老人の生活と近年の変化——タイの場合」▽田中耕司「東南アジアの自然環境と人々の暮らし」

先進医療技術の波及と「健康」という人類に普遍的な科学概念でゆきわたる globalization の波に洗われながらも、東南アジアの人々はその地で生まれ、既存の医療システムのなかで疾病とむきあい、やがて老い、ある種の死生観をもって死んでゆく。その意味で人の、生・老・病・死は、その地域固有の生態系とその民族の歴史と価値観が規定する相対的な概念でもあり得る。東南アジアの今後の医療の動向が、欧米諸国がかつてたどった同じ道をめざすという保証はいまのところない。本セミナーでは、東南アジアの疾病と老化の実態を明らかにしながら、一方で、フィールドワークを通じてみえてくる地域固有の人々の健康概念や死生観をもう一度とらえなおすことを試みた。

（文責：松林公蔵）



ランボー教授の講義に熱心に
耳を傾ける受講生たち



講義の後、センター東棟前で
懇親会が開かれた

小板橋 努



東南アジア研究センターは身近な存在でありながらも、今回初めて当セミナーに参加しました。大学では病原細菌学を専攻していますが、知識の殆どは紙から得たものであり、実際に現地調査・研究を行っている講師の方々の話を直接聞くことができ、大きな収穫があったセミナーでした。平素よりアジア各地の風土病ともいえる感染症や、それぞれの地域の自然環境や生活習慣、宗教、それらに根差した事物の考え方に大きな興味を持っていたので、多くの体験に基づく講義内容を、今まで自分が見聞きした事例と突き合わせながら受講していました。そして特にこれまであまり意識していなかった国際保健学の分野、老年医学の分野の重要性を実感させられました。これは専門に特化した学会や講演会ではなかなか得難い、より広域なテーマで開催される本セミナーの大きな特徴の1つであると思われます。このような知識の面だけでも本セミナーへの参加意義はあったと思いますが、受講生同士の交流が更に大きな収穫に繋がりました。

た。総数20名程度と少人数であり、それぞれが異なるバックグラウンドを持っている参加者間で互いに意見・情報を交換しやすく、また殆どが国際医療・熱帯医学に興味を持っているので、同じ目線で事物を話し合うこともできて良かったと思います。そして異なる研究分野間での交流こそが今後の日本の国際協力・国際研究の課題点であるとするならば、それだけでも本セミナーの開催意義は大きいのではないでしょうか。ただ、プログラムに組まれていた、折角の自由討論の時間が有効に活用しきれていなかったのではないかと、という点が残念に思われます。これは自分も含めてなのですが、参加者自体の発表意欲がそれ程高くなかったという事もありますし、その討論が「受講生から講師への質問」に終始した感があるからです。初日から受講生間での活発な討論ができていたら、と感じました。その点を今後の運営課題にさせていただけたらと思います。今回のセミナーのテーマは「生・老・病・死」であり非常に興味ある分野でしたが、今後も興味ある分野での開催時は積極的に参加していきたいと考えています。そして、今後の自分の行動に繋げていけたらと思います。

(京都大学大学院医学研究科)

東南アジアセミナーに参加して

西 千晶



「東南アジアにおける“生・老・病・死”——フィールドワークの現場から」という今年のテーマは、「国際保健を勉強したい」と思い大学院に進学した私にとってはとても興味深い講義が多く、大変有益であった。「保健・医療」の分野はそれ自身が独立して存在するのではなく、その国の文化や政治の影響を密接に受けて成り立つ社会のシステムであり、文化あってこそその「保健・医療」だと私は考えている。さらにそこには必ず「生・老・病・死」がついてまわる。セミナーでは技術支援の事例紹介と同時に東南アジア諸国の文化や習慣も紹介されるので、文化や習慣を通して「その国の人々の保健・医療に対する考え」を知るためのよい機会であった。

講師の先生方が東南アジア諸国でのフィールドや活動経験をお持ちで、さらに国際協力の立場から活躍された際の経験やデータをもとに、単なるレビューではなく、失敗談もまじえての講義をしてくださったので、それもまた魅力であった。一口に「生・老・病・死」といっても、東南ア

ジア諸国の人々の考えるものと私たちが考えるものとは大きく開きがある一方で、意外な共通点（または過去に日本でも存在した？）が見られることや、日本では既に、生と死が「非日常化」してしまっているが、東南アジア諸国の人々はまだまだ身近に感じながら生活していること、また、開発途上国の乳児死亡率や妊産婦死亡率、平均余命が延びればそれがすなわち開発途上国の「健康向上」といえるのか——医療支援ははじめ「現地の文化や人々のアイデンティティを改善せずに開発支援協力していくことの難しさ」について、実際の体験談やスライドを見ることができ、大きなインパクトがあった。さらに、途上国支援が持ち合わせる「負の効果」についても「農業開発地域におけるマラリア蚊の発生例」について、レクチャーのなかで触れられ、途上国支援と途上国の従来から存在する「生・老・病・死」との折り合いをつけることの難しさを改めて考える機会でもあった。もう少し欲を言えば、人々の「生・老・病・死」に少なからず影響する東南アジア諸国の経済や政治の変化が、アジアの人々の健康に影響を及ぼしたのかどうかについての事例紹介なり分析など「アジアにおける経済発展と健康転換」のような時間があったのもよかったのではないかとと思う。

(京都大学大学院医学研究科)

『地域研究のあゆみ——東南アジア研究センター35年史』を刊行

センター創立35周年を迎えて、『地域研究のあゆみ——東南アジア研究センター35年史』を刊行した。実は、ほぼ10年前、『地域研究へのあゆみ——東南アジア研究センターの25年』と題する冊子をつくるために、とりわけ創設時の諸状況がつぶさに調べあげられていたが、この冊子は故あって公刊されなかった。この35年史は、『地域研究へのあゆみ——東南アジア研究センターの25年』に拠りつつも、通史を書くことを念頭において大幅に再編し、さらに最近の10年間の歩みを追補した。官制化前史を入れるとほぼ40年にわたる通史の部分は、それぞれの時代の特徴を捉えて、官制化前史（1965年まで）、センター官制化と発展（1965-79年）、新たな展開（1979-90年）、総合への道（1990-98年）、新たな飛躍に向けて（1998-2001年）、というような章立てになっている。

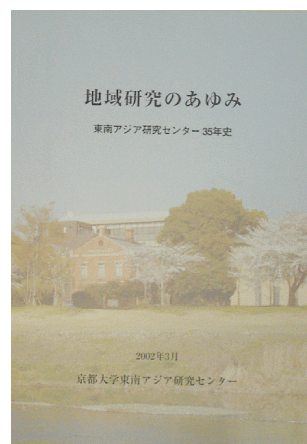
センターの35年は、楽しくもまた苦しい「地域研究」との戦いであった。ディシプリンと地域研究とのかねあひ、1国1地域の研究とより大きな地域を対象とする人との「地域」概念をめぐる論争、個人と共同研究のバランスの保ち方などなど、創設時代に始まった論争は、実はまだ終わっていない。とりわけ、大学院教育が加わってからは、院生たちをディシプリンなしで地域に飛び込ませるのか、ディシプリン教育を先に仕込むのか、人によってその濃淡はさまざまである。しかしながら、このような中で、ディシプリンを越え、1国研究を越え、異分野間の共同研究を通して、個別地域研究から世界地域研究へと飛躍してゆく

べきであるという緩いコンセンサスが定着し、それぞれにこの方向を模索しているのがここ10年ぐらいの状況であろうか。

通史を重視したために、研究を支えてきた図書や地図画像資料の整備、編集・出版や情報処理、事務方のご苦労などについてはやや手薄になってしまったことは否めない。しかし、このような情報は、アップデートされた情報にこそ意味があり、そのためにセンターは所報、要覧、CSEAS Report、ニューズレターなどの刊行と、とくに最近ではインターネットのホームページの充実にも力を入れてきた。

大学の独立法人化を前にして、センターの50年史はあらか、40年史が書ける状況にあるのかどうかすら定かではない。なお、ここ3、4年のうちに、センターも大学院の方も、スタッフの大幅な世代交代を終える。本冊子は、センターの来し方を公にするだけでなく、センターの次世代が過去を振り返り、行き方を考えるやすがになればとも思い、古い世代によって編まれた。

（文責：海田能宏）



◇『東南アジア研究』40巻1号

Southeast Asian Studies 40(1)

The Significance of Forest to the Emergence of Batek Knowledge in Pahang, Malaysia. Lye Tuck-Po ▼「ラオス・モン族の食糧問題と移住」鈴木基義；安井清子 ▼「インドネシアにおけるイスラーム左派と知識人ネットワーク」見市 建 ▼Environments and People of Sumatran Peat Swamp Forests I: Distribution and Typology of Vegetation. Momose Kuniyasu; Shimamura Tetsuya ▼Environments and People of Sumatran Peat Swamp Forests II: Distribution of Villages and Interactions between People and Forests. Momose Kuniyasu ▽書評 (Book Review) Jane Richardson Hanks; and Lucien Mason Hanks. *Tribes of the North Thailand Frontier*. Hayami Yoko ▽現地通信 (Field Report) 「パロロは出たか？」五十嵐忠孝

◇『東南アジア研究』40巻2号

Southeast Asian Studies 40(2)

「オランダ植民地統治と法の支配——統治法109条による『ヨーロッパ人』と『原住民』の創出」吉田 信 ▼「インドネシア新秩序体制下における『地方』の創造——言語・文化政策とランブン州の地方語教育」金子正徳 ▼「タイ王国東北部農村世帯の生活構造における野性動植物採集の位

置づけ——生活時間のアプローチから」芝原真紀 ▼ Ecological Factors of the Recently Expanding Style of Shifting Cultivation in Southeast Asian Subtropical Areas: Why Could Fallow Periods Be Shortened? Momose Kuniyasu ▼ Integrated Coastal Zone Management (ICZM) in Indonesia: A View from a Mangrove Ecologist. Sukristijono Sukardjo ▽ 書評 (Book Reviews) Jeroen Touwen. *Extremes in Archipelago: Trade and Economic Development in the Outer Islands of Indonesia, 1900-1942*. 濱元聡子 ▼ Frederick Cooper; and Ann Laura Stoler, eds.

Tensions of Empire: Colonial Cultures in a Bourgeois World. 村上 咲 ▽ 現地通信 (Field Reports) 「東ティモールに日は昇ったか？」青山 亨 ▼ 「政党政治

の実践とカンボジアの村社会」小林 知 ▼ 「図書館の扉の向こう——タイの大学図書館活動から学ぶこと」北村由美

◇ 研究報告書シリーズ (Research Report Series)

■ Hayashi Yukio; and Aroonrut Wichienkeo, eds. 2002. *Inter-Ethnic Relations in the Making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China*. Bangkok: Amarin Printing and Publishing.

■ Maria Ginting, compiled. 2002. *A Bibliography of Journals from Southeast Asia in the CSEAS Library*.

出版ニュース Publication News

『センター35年史』 ——回顧のなかの過ぎ去りし時代

林 行夫

創設後の早い時期からセンターに参加した編者の細かい配慮が行き届いた35年史である。日本人初の研究生となった1981年からセンターを知る者には、ご先祖様の苦闘の十数年は伝えきくものでしかないが、20年ほど前のセンターは、呪文のように現地語が飛び交い、成功失敗取り混ぜてのフィールド経験が生き生きと語られていた場所であった。異様な知的風情のなかで教官は専門が異なる同僚の研究室にすわり、よく飲みよく食べ大声で議論していた。国際、学際、うるさいの「三彩」を実践していた。表面的な見方で書かれた研究書を一蹴し、地面をはいずりまわるミクロと人類・地球規模のマクロの視点を融合させようという気概に満ちていた。また、調査地は調査対象以前に、まず友人を得てその社会から懸命に学ぶ場所だという姿勢も教えられた。文化の情緒的な側面は面倒なつきあいを通して初めて接近可能になる。思うに、学際研究をうたい地域研究を主導するセンターは、そうして時を重ねてきた、はずだった。

予期せぬ激震に加え、数十年も制度が続けばどこでも金属疲労ならぬ制度疲労が起こるといだが、今や世界の共存をうたう地域研究は競争的資金でなりたっている。市場経済を軸とするグローバリズムは地域よりも国家を、共存よりも競争を強要する。グローバルスタンダードとは何なのだろう。自分には地域研究とはまず専門的な理論をかじり、具体的な地域の先行研究をやり、その現地語をおさめたうえで長期のフィールドワークをして、はじめて何らかの議論をさせてもらえるような長期プログラムであった。身体と年齢を賭した研究は、一教科となり制度的に整うことにもなった。だが、かつての姿が美しき残像となるのは齢を重ねたということにつけるのか。当時のセンターを知る教授も僅かである。センターの地域研究はどこへ向かうのだろう。情緒なき専門家の集まりとなりはてるか。『45年史』はありえるか。重く、辛い。(センター教授)

『地域研究のあゆみ——東南アジア研究センター35年史』を読んで

水野 広祐

センターの35年を、その時々思いや到達点を振り返り、学外者やセンターの過去を知らない若手にも、地域研究との格闘の跡を伝える、優れたセンター史の書である。場所も変わり人も変わりながら、こうした通史が書けるといこと自体、センターが地域研究という共通の目標を持つとともに努力してきたという事実を伝えるものであろう。

『『普遍原理』を無原則に適用する学問スタイルはすでに破産し、個々の地域ごとに形象化している特殊の中から新たな規範群を掘り起こしてゆくのだ』『ディシプリンを超え、一国研究を超え、異分野間の共同研究を通じて、個別地域研究から世界地域研究へと飛躍すべきである』とするコンセンサスは常に振り返られるべきである。時間をかけて一步一步研究を進めてゆくとしてもその実現は容易ではない。このコンセンサスの実質化と、新たな地平の模索が、次なる世代の課題であろう。これまでの地平に到達するまでには、センターの組織形態の絶えざる改革、予算獲得の努力、海外事務所設置と維持運営の努力、大学院教育にむけた努力、図書室充実の努力、そして何より地域研究論の確立のための努力があったことをこの書は伝えている。また、財源の時期ごとの相違や、研究者の世代ごとの経歴やその研究成果の変遷など、さりげなく、しかし鋭い分析を行っている。そして今日、COE や科研費をはじめむしろ潤沢な予算や、研究業績に裏打ちされた世界に広がるネットワークをわれわれは利用することができる。

地域ごとの形象を、野の声に耳を傾け地域で生活するなかから探るといふ初心に立ち返り、センターのもつ自然、社会、文化の三部門よりなる学際的研究という特色を生かし、海外事務所やフィールドステーションを用いた、二国間・多国間のほんとうの共同研究を推進するなかで、世界の地域研究センターを作り上げるよう努力するんだぞ、という後輩へのメッセージが伝わってくる35年史であった。(センター助教授)

<センター来訪者>

5月20日	Dr. Alex de Voogt (ライデン大学アジア・アフリカ先住民族研究所国際交流担当)	9月21日	Dr. Caverlee S. Cary (カリフォルニア大学電子化アトラス推進事業東南アジア担当編集者)
5月29日	Mr. Yan Hongcai (吉林省農業大学農学部助教授) 他6名	9月27日	Dr. Ir. H. M. Natsir Nessa (ハサヌディン大学大学院プログラム科長)
6月6日	Dr. Lukman Hakim (LIPI 科学支援部門次官) 他2名	10月9日	Dr. Nor Hashimah Jalaluddin (マレーシア国民大学マレー世界研究所研究員)、Dr. Zaharani Ahmad (マレーシア国民大学人文社会学部言語・言語学センター言語学プログラム長)
6月13日	Dr. U Thaw Kaung (ヤンゴン大学中央図書館名誉教授) 他1名	10月15日	Dr. Muhammad Salleh (マレーシア国民大学マレー世界文化研究所所長)
6月20日	Dr. Lothar Von Falkenhausen (京都大学大学院文学研究科客員教授)、Dr. Magnus Fiskesjo (スウェーデン極東文物博物館館長)	10月23日	Dr. Lee Han Woo (西江大学東アジア研究所研究員)、Dr. Hwang In-Won (世宗研究所客員研究員) 他1名
7月29日	Ms. Yasmin Sungkar (LIPI 主任研究員) 他1名	10月28日	Prof. Immanuel Wallerstein (ピンガムトン大学フェルナン・ブローデルセンター所長) 他1名
8月1日	Prof. Chew Yong Tian (国立シンガポール大学) 他3名	10月29日	雷于新氏 (中国農業博物館館長) 他4名 ; Prof. Hjorleifur Jonsson (アリゾナ州立大学人類学部准教授)、Dr. Yang Guangyuan (雲南民族学院民族文化学院長) 他2名
8月7日	Dr. Ir. Gadis Sri Haryani B. (LIPI 陸水学研究所長)、Dr. Jan Sopaheluwakan (LIPI 地球科学副議長)		
9月2日	Sr. Mary John Mananzan (フィリピン聖ニコラスティカ大学学長)		

©"Ecotourism and Ecoresources" by Yamada Isamu, May 23, 2002.

Ecotourism has become a major tourism issue in the tropics. The merit of ecotourism is that it may help develop larger areas free from destruction of the natural environment. The most advanced countries in this regard are in South and Central America, such as Costa Rica and Ecuador, where tourist agencies have prepared tour menus ranging from the seaside to inner tropical mountains. Most ecotourism exhibits the original landscape of the area and accomplishes the conservation of the natural environment and its resources. But ecotourism faces the serious problem that most of the remote areas are torn by conflict between the local people and government policy.

For the moment, guides have the most important role in protecting nature, but in the future, the guide system should be improved to allow the total involvement of visitors in the environment. Many case studies from America and Asia were presented and the interrelationships between ecotourism and ecoresources management were discussed.

© "The Hidden History of the Philippine Guiqiao (Returned Overseas Chinese)" by Caroline Sy Hau, June 27, 2002.

This talk highlights the life stories of overseas Chinese returnees (guiqiao) in Mainland China who had formerly been based in the Philippines. Uncovering and recording the hidden history of the Philippine guiqiao — long marginalized from Philippine studies — is significant because the guiqiao's complex and fraught relation to both "Chinese" and "Filipino" nations forces us to question and re-examine the basic assumptions of loyalty, belonging, patriotism, education, and sacrifice often thought to underpin the theory and practice of nationalism. Some of the questions we will be asking are the following: How does one come to fall in love with one's country while living in another? How does one "school" oneself to become a "Chinese" patriot? How does being in the Philippines help to substantiate one's Chineseness? Did overseas Chinese nationalism play a part in promoting indigenous nationalism in Southeast Asia? Finally, I will also be exploring the implications of the study of returned overseas Chinese for encouraging similar, comparative studies in other Southeast Asian countries, and for potentially remapping the borders of Southeast Asian area studies to include South China and the experiences of the Southern Chinese.

©"An Empty Institution: National Forest Reserves in Thailand" by Fujita Wataru, July 12, 2002.

Thailand has experienced rapid deforestation since World War II, despite the establishment of a forest conservation system. In this presentation, I focused on the contradiction that a large portion of the national forest reserves, begun in 1964 and now covering more than 40% of the country, is actually occupied and cultivated by farmers. I tried to take Thai social features into account by analyzing the institutional structure of national forest reserves and the process of implementation in local offices. My study was based on official documents and interviews with forest officers in Bangkok and Ubon Ratchathani province.

Institutionally, the national forest reserve system lacks effective policing. It is commonly said that this institution was part of an integrative economic development plan beginning in the 1960s and aimed at scientific timber production. But, in fact, national forest reserves do not cover commercial logging areas. Forest protection units, the sole system of regular policing at the field level, were insufficient to protect the forest and were mostly established near logging areas. Therefore the conservation of national forest reserves not overlapping with logging areas was given little attention. In fact, the rough-and-ready designation, lacking investigation of residences or cultivation, resulted in massive "illegal encroachment" by farmers. At the field level, therefore, forest officers often used their discretion to overlook local people's breaching of forest laws. This reflects Thai society's sense of balance and flexibility in dealing with regulations.

©"Introduction to My Research Activities in Myanmar, Laos, Yunnan, and Kazakhstan: Objectives, Methodologies and Integration" by Ando Kazuo, September 26, 2002.

The difficulty of conducting joint study, or team research, has been a subject of recent discussion at CSEAS. Why is it difficult? I think we often overlook the advantages of joint study, and my present interest is in how to break through this tendency. I propose a two-stage procedure of cooperation and integration. At the first stage, we must return to the basic purpose of area studies. We should first develop team cooperation through a base-line "necessary study," e.g. collecting basic information about the daily life and administration systems of a village or local area. With these findings, we can proceed ↗

Colloquium

A. Terry Rambo

At 6 A.M. I was sitting shivering in the chill morning air in front of the Hmong house in Vietnam's high mountains where I had slept the previous night. A young Kinh (ethnic Vietnamese) colleague and I chatted desultorily while waiting for the coffee water to boil. Just meters in front of us, members of our host family, first the father and mother, then the two young daughters, took turns washing their faces and hands using a single small bowl of water. They were careful to not spill even one drop of the precious water that they had carried on their backs in plastic jugs from the nearest source, more than 10 km across the steep mountains. While this scene was unfolding before our eyes, my colleague remarked that the Hmong were very dirty and never washed! I pointed out that the girls were washing their faces as we spoke. He responded that they must have learned to do it from the Kinh teachers, but that adults never washed. Even though he was staying in a Hmong village, with abundant chances to observe how the people actually lived, he wasn't able to see through the stereotypes he had brought into the field. He returned to Hanoi knowing no more about the realities of Hmong life than before he went to the field. In fact, experiencing the undoubted discomforts of life in their remote village had reinforced his views that they were backward and uncivilized.

In area studies we see fieldwork as the royal road to knowledge. Direct, first-hand observation is considered the best means of acquiring an understanding of alien societies. I certainly don't disagree with this view and have relied on this method myself throughout my research career in Southeast Asia. But I have increasingly come to wonder about

the validity of much of the information we collect. Are we perceiving and reporting what is actually happening or are we, like my young Kinh colleague, seeing through very distorted lenses? The history of area studies is littered with examples of "findings" that have been shaped by our own preconceptions: loosely-structured Thai society, Vietnamese peasant economic irrationality, Malayan triple canopy rainforest, the list of examples of field data being force fit into our preexisting categories is endless.

Ironically, the solution to this problem, to the extent one exists, is not less fieldwork but more of it. It is only through deep immersion in the field that we can hope to obtain the new information and insights that will permit us to transcend, at least partially, the sureties of the conventional wisdom. But simply making more observations is inadequate; observation must be linked to the attempt to answer explicit questions. Trying to answer carefully formulated questions forces us to observe in a systematic way and to test our observations in a way that is likely to reveal the extent to which they conform to reality. If, for example, my Kinh colleague had gone to the Hmong village to answer the question of how people living in a situation of water scarcity use this precious resource, he would have been forced to see that they used some of that water for personal hygiene. Of course, we have to ask the right question for the specific situation we are studying. The wrong question can be even more dangerous than no question at all. So, the first question I want to ask of a researcher doing fieldwork is not "what are the methods of data collection he/she is using?" but "what is the question he/she is trying to answer?"

(Professor of CSEAS)

↳ to a "progressive study." Integration will emerge out of cooperation and discussion among team members, leading to the formulation of desired output of the on-going study and objective of the next joint project. An alternative view of the study area or the identification of specific problems that require an integrated approach may also emerge.

As a result of my current joint research in Myanmar, Laos, Yunnan, and Kazakhstan, I can formulate the following objectives to elucidate the process of Indianization: explore the expansion of the world of Bengal into Southeast Asia, the road of Esoteric Buddhism and the Southern Silk Route, and the distribution of farming technologies.

PALM-LEAF TEXTS IN KYOTO

By Aroonrut Wichienkeeo



Lan Na, the northern Thai kingdom officially annexed by Siam early last century, was founded by King Mangrai in 1296 A.D. Historical sources of Lan Na studies are available in inscriptions, especially palm leaf manuscripts found in monastery

libraries. These documents take various forms, such as local histories, customary laws, religious texts, medical treatises, and local literature. Most of them were inscribed by monks or former monks more than 400 years ago in Lan Na or Tai Yuan scripts that are not currently used in Thailand. These texts were commissioned by temple abbots for teaching in the temples. The distribution of Tai Yuan scripts and palm-leaf texts coincide with the spread of the "Yuan Sect" (Suandok and Padaeng Sect) of Theravada Buddhism, which reached as far as Shan State in Myanmar, Sipsongpanna in the Southern Yunnan, Laos, and northeastern Thailand.

The palm-leaf texts were written by abbots or monks, and villagers also made merit by offering texts to the monks for reading and for dedication to their parents' or relatives' spirits. Because of such practices, a large number of palm-leaf texts are kept in the temples' libraries. These documents are very valuable for further study of the northern region of Thailand, the Shan State, Laos, and southern China. Scholars have been using these old documents for 30 years.

Fortunately for scholars of Lan Na studies and thanks to the Phumipalo Foundation (Bangkok) and the Toyota Foundation, the Department of Sociology and Anthropology in the Faculty of Social Sciences at Chiang Mai University has since the 1970s undertaken a project of collecting palm-leaf manuscripts, storing them on microfilm, and transcribing them into modern Thai script. The Department of History, Faculty of Humanities, Chiang Mai University, introduced an undergraduate course in the Lan Na language that included translating a number of palm-leaf texts. Later the four Rajabhat Institutes in the northern region started to teach Lan Na language courses. They have also encouraged teachers and students to translate many palm-leaf texts into the modern Thai language.

In foreign countries, the palm-leaf texts are well known to some scholars. In 1985, the Department of Anthropology in the Research School of Pacific Studies, The Australian National University, catalogued more than 200 palm-leaf texts that the late Dr. Richard Davis hired ex-monks in Nan Province to copy by hand. The Law of Mangrai, one of the palm-leaf texts from Nan temple, was transcribed into English by the late Dr. Gehan Wijeyewardene. In 1996, on the occasion of the celebration of the 700th anniversary of Chiang Mai City, Prof. David K. Wyatt, Department of History, Cornell University, translated the Chiang Mai Chronicle into English.

In 2002, Prof. Hayashi Yukio, CSEAS, Kyoto University, who has undertaken the project "Inter-Ethnic Relations in the Making of Mainland Southeast Asia and Southern China," proposed constructing a database of the ethnic groups found in a variety of palm-leaf texts. This database is a collection of all the ethnic groups described in the texts, such as Chinese Muslim, Lawa, Karen, Mon, Shan, Burmese, Lao, etc., and their living cultures, including beliefs, rituals, clothes, and food. This database will be helpful for scholars who cannot understand the old language and for those who lack the time to study the palm-leaf texts themselves. This database is going to be an essential basic tool for further studies. As a Chiang Mai person and as a researcher on this project, I would like to take this opportunity to express my sincere thanks to the Toyota Foundation and all scholars who value and preserve old texts for the coming generations and intellectuals of local heritage.

It was with great delight and excitement that I accepted the fellowship at CSEAS. I had spent six months here as a Visiting Research Fellow in 1987, and I am indebted to CSEAS for enabling me to return to Kyoto. When I arrived last February I saw how things had changed. I find that Kyoto is still a fantastic historical city, but I notice a great number of cars in the roads. Despite that, I observe that the people in Kyoto are still very nice and kind, and I appreciate it so much. I could say that I love Kyoto and its people.

(Visiting Research Fellow)

IT'S ALL ABOUT THE NATION-STATE

By Rigoberto D. Tiglao



Coming to CSEAS after a year in government (as spokesman of President Gloria Macapagal-Arroyo), my academic interest has naturally been focused on what is needed to move our country forward. That's certainly an ambitious research agenda. Thousands of volumes are devoted to analysis of why some nations have grown in the last century while others have stagnated.

There are indeed many, many factors, one of which Japan has demonstrated in its modern history. This factor may seem preposterous to discuss at this time, when there is an avalanche of criticism directed against the Japanese government alleging weakness, dilly-dallying in economic reforms, and policy paralysis on the part of both political leaders and bureaucrats.

Nevertheless, there was a crucial factor in Japan's twentieth century growth and I have concluded that it is this: Japan succeeded in constructing a strong modern nation-state, largely based on the foundations built by the Meiji Restoration. Japan's resurgence even after its industrial backbone was destroyed in World War II proved the strength of that nation-state.

By "nation-state" I mean not only the Japanese state or government, not only the Japanese nation—but that single entity that is essentially a territorial organization or corporation. In a strong nation-state, most of its members have a strong sense of membership in that corporation and its "officers"—putting aside the Lockheed and other scandals—have a strong sense of duty to make that corporation prosperous.

Japan would seem to have an advantage in this aspect, having had centuries and centuries of state-building. The *Nihon Shoki* of the eighth century already described the history of the Japanese nation or its state as the Emperor's realm. There were also nearly three centuries when Japan had one of the world's strongest and most centralized states, the Tokugawa shogunate.

However, by the early nineteenth century, Japan's nation-state was practically crumbling as it became more a collection of 200-plus practically independent domains, each ruled by powerful—and often warring—*daimyos*. Even the central state had become an arena of struggle, most importantly among the shogunate, the Emperor, and the most

powerful *daimyos*.

The imagined community (in Benedict Anderson's definition of a nation) for most Japanese was not Dai Nippon, but membership in a clan. As Tokyo University professor Kiichi Fujiwara explained in a CSEAS symposium September 12, as late as the early twentieth century, ordinary Japanese did not think of themselves as Nihonjin.

The Meiji Restoration changed all that. The modern Japanese nation-state—which made possible Japan's economic prosperity—is a construction of the twentieth century. Meiji leaders in fact were keenly conscious of their project, and swiftly adopted—the modern term would be "pirated"—much of the political technology of strong European (mainly German) states. They even had an association and a journal 『国家学会雑誌』, *Kokka Gakkai Zasshi* or Journal of Nation-State Studies!

At the same time, they forged a sense of nationhood by celebrating and propagating centuries-old traditions. Some analysts claim that a few of these so-called old traditions, like "*wa*" (harmony) and *furusato* (hometown or birthplace) were Meiji-era inventions. Japanese martial arts that appear to be centuries old, like judo and karate, were constructs of the early twentieth century. Judo has become a national sport, thanks to the modern police, which has had to rely on unarmed fighting skills, thanks to Japan's strict gun laws.

That there was hardly a Japanese nation-state until the turn of the century is even reflected in the Japanese terms for people, nation, and nation-state. For most of its centuries of existence, Japanese referred to their country as *kuni* 国, which does not refer to the nation-state as such, but to the land or even one's home province. The Meiji intellectuals invented the term that would more accurately represent the nation-state, *kokka* 国家, the characters for which mean the people being in one house or building.

Despite the current gloom and doom among analysts over the Japanese economy, I think the most important thing is the Japanese nation-state. It's obviously quite intact; therefore, it will eventually reenergize itself to correct its economy, inspire its entirely new post-war generation, and regain its confidence in the world arena. If the Japanese nation-state could grow after the devastating mid-century war, what's an economic downturn?

What's most important for me, quite naturally, is that all this gives me reason for optimism about my own country—and I'm extremely grateful to CSEAS for giving me this research fellowship. The modern Japanese nation-state was built in only a single generation, during the Meiji Restoration. The Japan we

see now was rebuilt from the utter devastation of World War II to become one of the richest nations on earth, also in the span of a single generation.

Get to know a Filipino, and you'll realize that we Filipinos have all it takes to build a strong nation-state; perhaps we'll be able to do it not in a generation but in just a decade.

(Visiting Research Fellow)

RETHINKING SOME OF THE LINKS BETWEEN CULTURE, ENVIRONMENT, AND FARMING SYSTEMS IN VIETNAM'S NORTHERN MOUNTAIN REGION

By Tran Duc Vien



Culture is the common property of a group of people. They maintain and constantly recreate that culture through a process of social interaction. It changes over time as people devise ways to cope with changes in their social and bi-

physical environment. Culture therefore tends to be adaptive.

Topographically and ecologically the northern mountain region of Vietnam encompasses astonishing diversity. It is also characterized by very great cultural diversity. Different ethnic groups, each with its own distinctive culture, are associated with different ecological settings. As each group has interacted with the particular environment in which they live, they have developed their own somewhat distinctive farming system. Farming systems concepts have featured prominently in discussions of agricultural development during the past decades. The farming systems approach is based upon a holistic view of farm-households, which displays the particular ways in which different groups and cultures have interacted with and adapted to the specific environmental conditions in which they carry out their production activities. The primary focus here will be on the culture and farming systems of three ethnic groups living in three different environments that have evolved into three distinct cultural landscapes:

High mountain areas located 800m or more above sea level, where living conditions are very difficult, are inhabited mainly by the H'Mong ethnic group. The H'Mong are well known for shifting cultivation and Rocky Pocket Cultivation practices. Many H'Mong also have some wet rice cultivation on terrace fields.

Low mountains with valley areas are located

around 200-300m above sea level. People living there are mainly Thai, Tay, Nung, and Muong. They have paddy in the valley combined with swidden on hillsides around the valley. They practice composite swiddening agroecosystems typical of the Tay group in the Da River Watershed.

Middle areas are located between two above areas and inhabited mainly by Khomu, Hanhi, Xinmun, and other ethnic groups. Their farming systems often combine elements of farming systems that we find in the high mountains with those from lower parts of the uplands.

By making a greater effort to understand both the cultures and the farming systems of ethnic groups in the uplands, we can learn much about indigenous knowledge of natural resource management as well as increase our appreciation of the process by which cultures adapt to changing socio-economics conditions. This kind of understanding is essential to scientists, policy makers, and all others concerned with achieving more effective management of natural resources and improving the living standards of local people.

Because the northern mountain region is highly variegated in terms of topography, climate, biodiversity, and culture, each ethnic group and each terrain type features a particular kind of cultivation system that reflects short term and long term adaptations in a particular environment. Economic and environmental changes result in cultural changes, which are reflected in the cultivation systems of the local peoples. These cultivation systems are, in essence, the short term and long term cultural adaptations these cultures have made in their quest for survival and progress. (Visiting Research Fellow)

TEA, CULTURE, AND THE LONE ANTHROPOLOGIST. OR, OF "RAW" AND "COOKED" BEHAVIOUR

By Charles J-H Macdonald

The kind of guest fellowship I have enjoyed here makes it possible to do some leisurely thinking, the kind of intellectual daydreaming so essential, I am told, to scientific progress. So I did spend time reconsidering concepts like "culture"—there is



an ongoing heated debate among anthropologists to either dump the notion or keep it alive—or puzzling over Japanese ways and things. As a guest of CSEAS, I am also a guest of the Japanese people and

their culture, which of course I look at with the eyes of a simple ignorant tourist but also with questions for which my anthropological mind craves answers. The tea ceremony is one and I will come to that in a moment.

Actually my main if not sole activity was to write a book about suicide, but taking place in the Philippines, not in Japan. At the beginning, I tried to answer the questions of my distinguished and so gracious counterpart, Hayami san, concerning this topic. I said something to the effect that suicide, at least in the place I had observed it, belonged not to "culture," but to "raw behaviour." She gave me a quizzical look. "Raw behaviour" indeed! Interesting concept, hmmm.

Let me explain. The kind of suicide I was studying was the act of individuals who had for personal and often obscure reasons decided to end their lives, despite everything culture—elders, experts in customary law, shamans, storytellers, other people—had to say against it. It was "raw behaviour" in that the action could not be defined as culturally determined.

The tea ceremony, by contrast, is something that is completely cultural in the sense that it possesses a script or blueprint, an explicit conceptual framework. It is a cultural artefact if ever there was one. As a simple (and again ignorant) spectator, what so fazed me about the *chanoyu* was its apparent silliness. How could so intelligent a people as the Japanese have an interest in, nay, regard so highly, something that looked so utterly boring and pointless, not to mention the added injury of inflicting such a foul beverage upon the guest.

I turned to some literature for the simple minded and bought a pamphlet called *Japanese Religions*. It was not a very good book but gave some basic information, including a special section on the "Way of Tea and Zen." It said things like: "In essence the tea ceremony or *chanoyu* is quite simple. Guests are invited to have some tea. The host pours some hot water... then offers tea to each guest... [who] appreciate[s] the fine tea bowl." *So desu ne*.

So, the tea ritual is actually a religious ceremony, or so I was made to understand. Its connection with Buddhism is clear and its moral content plain also. But why not just do *zazen*, go to the temple and meditate, or pray? And how do the social and religious aspects come together? There were loose pieces: religion, morality, courtesy, the gift, a special kind of setting, and the denial of social barriers. But it did not quite fit together.

The answer came unexpectedly as I was reading an entirely different sort of book. It was the translator's Introduction to *The Ten Foot Square Hut and Tales of the Heike* (A.L. Sadler, trans. Rutland,

Vermont and Tokyo: Charles E. Tuttle, 1972). Sadler might not have been a professional anthropologist but what he had to say about the tea ceremony is so anthropologically enlightening and delightful, such a pure and elegant interpretation, that I must quote it at length:

The taste for a retired life of elegance has always been and still is characteristic of the Japanese temperament, as is evident from the popularity of the philosophy of Cha-no-yu or Teatism, which enables even busy people to become temporary hermits in the Tea-room, to be in the world though for a while not of it, like the "moon-in-the market-place." The fixing of the size of the Tea-room as four and a half mats, the size of Chomei's hut, indicates its descent from the cell of the Buddhist recluse Vimalakirti who miraculously entertained in it the Buddha and three thousand five hundred of his saints and disciples, and has as it were crystallized and handed down the mood of Chomei as a historical-philosophical "retreat" for all who wish to refresh their souls by temporary retirement. [Sadler 1972: iii]

I find this explanation immensely satisfying. First, it brings together the two major dimensions of the ritual, the religious and the social. We are in a monk's cell, that of a recluse or hermit, a place where there should be no regard for social distinctions. One's experience with the divine and with the human coincide perfectly. They are one. And isn't it the supreme "courtesy" to transcend rank? So, things really come together. Second, by using the form and size of the tea room to demonstrate that it is a monk's cell, a place of seclusion or "temporary retirement," the whole interpretation of the tea ceremony is premised on the concept of liminality. "In this world but not of it." In short, it provides the unifying ground for this as well as many other institutions, religious and otherwise. If you haven't studied it, you don't know what liminality can do for you. It works better than adhesive tape or even the common paper clip. Liminality, then, makes it intelligible to me. It gives it beauty and transparency.

Of course, I may be way off the mark, but even so I am satisfying my anthropologist's curiosity and I can reconcile myself with the idea that the tea ceremony is a great and respectable institution. I was also able to make a little progress in my critical revision of the "culture" concept. We need culture, and a concept for it, but like the tea ceremony, it provides only moments of relief in a sea of raw behaviour. (Visiting Research Fellow)

IN CELEBRATION OF AREA STUDIES

By Neil L. Jamieson



Jet airplanes, bullet trains, and superhighways. The worldwide web and satellite communication. Globalization of the economy. All these and more are making the world smaller and more interconnected, and are making it increasingly im-

portant that we understand each other, and ourselves, better than ever before.

My stay in Japan is reminding me once more of just how difficult this is to do. I've had such reminders many times over the past 40 years, many of them spent living and working and conducting research in Southeast Asia: Vietnam, Thailand, Indonesia, and the Philippines. Combating ethnocentrism, my own and that of others, requires constant effort. Seeing the world through the lens of another culture is never easy for any of us.

I've visited Japan briefly a number of times, but never spent much time here. So Japan is truly a "foreign" culture to me. It would be helpful to have some guidelines and generalizations as I begin to learn how to deal with the new people and situations I encounter here. In recent months I've read a number of books and articles that attempt to explain Japan and the Japanese to foreigners. While some of them have been interesting and helpful, the picture they paint of Japan is incomplete and perhaps not entirely accurate.

All groups of people have their own stereotypes of themselves and of other peoples: the Americans, the Japanese, the Vietnamese, the Thai, and so on. It seems that very few of us understand our own culture and society very well, let alone those of others. We all tend to oversimplify and to generalize about large numbers of people and places based upon our own limited experiences. We still struggle to grasp the connections between the individual and the group, the local and the global, between our common humanity and our cultural distinctiveness.

Edward Said used the term "orientalism" to characterize certain Western efforts to describe certain Asian countries. He found these descriptions to be distorted in self-serving ways. In recent decades there has been a tendency in some circles to criticize other efforts to make generalizations about cultures or societies. Making generalizations about cultures or societies has been called "essentializing." This has been attacked as a bad thing to do because each society and each culture contains so much

diversity that any such generalizations would inevitably be misleading, and would often be harmful to people who were reduced to a mere caricature of themselves. This is true of ethnic groups, regions (Kansai, or New England), societies (America, Vietnam), and entire parts of the world (Europe, Asia, etc.).

But clearly we are all different, and there are patterns to be found in our differences. We must learn to understand and value these differences while remaining aware of our common humanity. Our efforts to describe and explain these similarities and differences may be deeply flawed, as some have charged. But the proper response is not to abandon the task; it is rather to redouble our efforts, to collaboratively build new and better ways to achieve understanding.

We human beings all and always make "models" of other groups. And by their very nature, models simplify the reality they attempt to describe. That's why they are useful. But just as a "map" is never the same thing as the territory it describes, models can never do justice to the complex webs of humanity that get labeled as "Vietnam" or "Thailand" or "Japan," let alone something like "Southeast Asia" or "the Far East," or "America." Our efforts to construct mutual understanding inevitably fall short of the ideal, but I have come to believe that collectively, over time, they can and often do provide valuable stepping-stones on the path to understanding.

Thoughts like these, stimulated by living in Japan for some months, lead me to appreciate even more deeply the great good fortune of spending time at Kyoto University's Center for Southeast Asian Studies. Every day I have the privilege of meeting and listening to and talking with people from different cultures, different nations, different academic disciplines, and different research areas. We are economists and agronomists, foresters and anthropologists, human ecologists and historians. We come from Japan and all the countries of Southeast Asia, from China and France and the United States, to name just a few places.

A good area studies program, as exemplified by the CSEAS of Kyoto University, consists of the disciplined interaction and collaboration of many people with different perspectives in the shared quest for understanding of some "area" of the world. Within this congenial multi-disciplinary, multi-national, multi-cultural environment, the questions and answers and experiences that are shared during conversations over lunch or in seminars and colloquia help all of us do a somewhat better job of describing and explaining the ways we are all alike in

some ways and different in others. There is no substitute for such collaborative effort in improving our understanding of each other, and of ourselves. And such understanding is essential to enable us to cooperate effectively in sustaining and nurturing our shared existence in this shrinking and rapidly changing world. I am proud and grateful to have been given the opportunity to be for a time one small part of the noble enterprise being conducted here.

(Visiting Research Fellow)

A ROOM WITH A CRACKED WALL AND A VIEW: NOTHING BUT FOND MEMORIES OF KYOTO

By Tsu Yun Hui Timothy



Last time I was visiting Kyoto, I had an office with an ominous-looking fault line running across one of its walls. My host, half-jokingly but also half-seriously, said that in the opinion of experts, the building was apt to collapse in the next earthquake

(however mild it may be), due to the structural deficiencies of hasty construction during the Oil Shock. Less life-threatening but nonetheless noticeable was the faulty ventilation fan on another wall. It promoted air circulation, but also allowed water to pour in when there was heavy rain. Perhaps I should also mention that the men's room was only millimeters away from flooding every time I flushed the toilet. But the point is: I thoroughly enjoyed my

stay. I had everything I wanted in my room: a desk, a chair, and a computer. The library was just minutes away. Moreover, my room offered a spectacular view of one of the hills with the *daimonji*.

I have seen facilities elsewhere in Asia. One leading university has air-conditioned toilets that do not threaten to throw up. I appreciate that, I must admit. Another one has escalators allowing its elite students and faculty to move between floors effortlessly. That is a great idea too; scholars hate nothing more than exercise. Yet another has award-winning architecture. Its buildings are a pleasure to behold against the seascape in the background. Quite a few others have cafeterias serving gourmet food, from suckling pig to endangered coral fish, which of course is a boost to morale. But the point is, I am happiest when in Kyoto.

Don't get me wrong: books count for only 55% of the pleasure. The hills in the north of the city contribute the other 45%. They are not just good to look at but absolutely fascinating to hike in. From my base in Shugakuin—which has its own range of remarkable features like the office I once had—I can be in the woods in 10 minutes. Recently, I saw a beautiful pheasant just 30 minutes into the hike. It was the first and only time I saw any wild life during many years of walking in Japanese hills. Such birds were once regarded as good omens. I only regret that the one I saw was not white. Perhaps next time I will have better luck. Who knows, Kyoto has treated me well so far.

(Visiting Research Fellow)

センター人の動き

阿部茂行 (4月18~24日) アメリカ合衆国「アジアと日・米・欧の経済・文化・政治リンクの総合的研究」▽河野泰之 (4月22~27日) アメリカ合衆国「ヒト、土地管理及び環境変動に関する会議出席」▽阿部茂行 (4月26日~5月8日) タイ他「資料収集及びネットワーク構築」▽松林公蔵 (4月27日~5月5日) 韓国「韓国において高齢者の健診」▽藤田幸一 (5月12~19日) ミャンマー「ミャンマー沿海部農村の臨地調査」▽河野泰之 (5月12~23日) ミャンマー「ミャンマーの農業開発・農村発展に関する調査」▽柳澤雅之 (5月12~25日) ミャンマー「ミャンマー経済構造政策調整支援のための調査」▽濱下武志 (5月22~31日) 韓国他「韓国木浦大学・上海復旦大学にて国際会議出席」▽安藤和雄 (5月23日~6月6日) バングラデシュ「参加型農村開発行政支援プロジェクトの研修プログラム指導」▽海田能宏 (5月30日~6月12日) バングラデシュ「参加型農村開発行政支援プロジェクトの調査」▽阿部茂行 (6月7~18日) タイ「アジアと日・米・欧の経済・文化・政治リンクの総合的研究」▽濱下武志 (6月11~19日) タイ他「バンコク・クアラルンプール・ジャカルタにおける華人ネットワークの調査」▽白石隆 (6月12~18日) インドネシア「インドネシア地方エリートに関する資料収集」▽河野泰之 (6月

17~20日) ラオス「アジア・熱帯モンスーン地域における生態史モデル構築に関する研究打合せ」▽柳澤雅之 (6月17~29日) ベトナム「ベトナム国 Moc Chau 県傾斜地農業発展史に関する調査」▽白石隆 (6月22~26日) インドネシア「インドネシア経済政策支援調査」▽C. Hau (7月2日~8月31日) アメリカ合衆国「フィリピンにおける華人の文化習慣と主体形成に関する調査」▽白石隆 (7月2日~10月1日) タイ「バンコク連絡事務所駐在、タイ中産階級に関する調査」▽藤田幸一 (7月9~10日) 韓国「東南アジア農業に関する打合せ」▽柳澤雅之 (7月9~10日) 韓国「東南アジア農業に関する情報交換」▽水野広祐 (7月12日~9月25日) インドネシア「過渡期インドネシアにおける住民組織と制度に関する研究」▽石川登 (7月13~29日) マレーシア「ボルネオ及びその周辺部における移民・出稼ぎに関する研究」▽安藤和雄 (7月15日~8月15日) ラオス他「ラオスとミャンマーにおける農村開発及び持続的農業の調査」▽P. Abinales (7月15日~9月16日) アメリカ合衆国「ウォーラセア地域における密輸に関する研究他」▽柳澤雅之 (7月29日~8月8日) ベトナム「ベトナム国 Nam Dinh 省バクック村落調査」▽河野泰之 (8月3~11日) ミャンマー「ミャンマー中央平原地帯における小規模灌漑農業の調査」▽西沢光昭 (8月4~10日) タイ「WHO/FAO 主催の食品のリスクアセスメント会議出席」▽田中耕司 (8月11~31日) インドネシア「ウォーラセア海域における生活世界と境

SIX MONTHS IN KYOTO

By Maria Ginting



April 22nd 2002, my first day in Kyoto. From Kansai Airport, I met the MK Taxi driver who drove me to my hotel in Kyoto. It was early in the morning and the weather was quite cool. Along the way, I looked around for *sakura*. Spring had arrived

but the trees were no longer in bloom. I remember that my son had asked me to take a picture under the *sakura* blossoms.

This is the second time for me to come to Japan. Seven years ago I stayed for a while in Tokyo, a big city with tall buildings and a hectic pace of daily life. When I came to Kyoto, I was very surprised at how beautiful and unique the city was. Kyoto looks very natural with its mountains and river. Of course, Kyoto is most famous for its temples, shrines, and festivals. I enjoyed visiting Kiyomizu Temple, Fushimi-Inari Shrine, and Kodai-ji Temple. I will always remember a special night with my friend at Kodai-ji Temple—the fantastic view of the temple itself with the beautiful pond and bamboo trees under illumination. It was the most beautiful thing I had ever seen.

Sometimes, I took a short walk downtown on Shijo Street. I saw the fashionable girls with mini-skirts. But even though people in Kyoto look Western, they still keep traditional customs. The girls wear *yukata* and *geta* at events such as the Gion Festival and fireworks displays. And although Japan is an industrialized country with tremendous automotive production, many people in Kyoto still use bicycles in addition to other transportation. I also enjoyed riding a bicycle around Kyoto.

I was worried about the cold weather in Kyoto. Before leaving Indonesia, I watched the weather forecast, seeing that spring weather in Japan was about 15 degrees Celsius. I prepared myself with a coat, jackets, and thick socks. But it was not cold at all and soon changed to the rainy season and then summer. What I could not imagine was the summer; for me it was *kibishii natsu*. I felt very weak, dry, and tasteless. Thanks to God, I survived this stifling hot weather, though not smoothly.

I worked as a visiting research fellow for six months at the CSEAS library processing Indonesian books. The library has a large collection, especially on Indonesia. I think that one day, if we can not find some literature in Indonesia, we may find it in this library. I also analyzed the journals from Southeast Asia which are held by the CSEAS library up to 2001. Among the 233 romanized titles are 40 from Brunei and Malaysia, 4 from Burma, 1 from Cambodia, 100 from Indonesia, 28 from the Philippines, 18 from Singapore, 26 from Thailand, and 16 from Vietnam; this is in addition to 39 titles on Japan (in English) and 274 titles from countries all over the world. Most of the journals are about social sciences and fewer on other subjects.

I believe I was able to do my work because of the support of my counterpart and the staff at CSEAS library. I would like to thank Ms. Yumi Kitamura, who arranged many things for me, and all the library staff, who were very helpful both in work and in guiding me in Japanese culture and daily life in Kyoto. I hope we can always keep in touch even though we are far away. I have really enjoyed spending six months at the CSEAS library with all of you.

The stifling hot weather has passed and the finest time, autumn, will come, but before the leaves fall I have to return to Indonesia. Finally, *Sayonara ... Sampai jumpa lagi.* (Visiting Research Fellow)

▽ 界管理の動態的研究」▽海田能宏 (8月17～24日) バングラデシュ「アジア太平洋総合農村開発センター技術委員会出席」▽山田勇 (8月17日～9月16日) 中国「環ヒマラヤ広域圏における社会と生態資源利用の変容過程に関する調査」▽藤田幸一 (8月18～30日) マレーシア他「マレーシア・カンボジアの経済・社会に関する書籍資料の収集」▽北村由美 (8月19～31日) アメリカ合衆国「東南アジア関係資料収集及びコレクションに関する調査」▽阿部茂行 (8月20～23日) 中国「国際会議出席」▽柳澤雅之 (8月25日～9月6日) オランダ「国際ベトナム村落研究会議出席」▽林行夫 (8月25日～9月23日) タイ他「タイ・ラオス・カンボジアの宗教行政に関する調査」▽安藤和雄 (8月27日～9月10日) カザフスタン「カザフスタンの農村における環境問題の調査」▽石川登 (9月4～25日) アメリカ合衆国「合衆国議会図書館における東南アジア関係資料収集」▽C. Hau (9月13～25日) シンガポール「資料収集及び会議出席」▽藤田幸一 (9月14日～10月1日) ミャンマー「経済構造調整支援のための農村調査及び会議出席」▽濱

下武志 (9月15～19日) マレーシア「マレーシアに関する華人研究コロキウム参加」▽西淵光昭 (9月16～30日) バングラデシュ他「腸管感染症の発生状況の調査」▽山田勇 (9月17～21日) インドネシア「東南アジアにおける土地管理と生物多様性に関する国際シンポジウム出席」▽河野泰之 (9月20日～10月1日) ミャンマー「ミャンマーの農業開発・農村発展に関する調査」▽C. Hau (9月27日～10月20日) 中国「資料収集及び現地調査」▽柳澤雅之 (9月28日～10月24日) タイ「東南アジア気象関連資料収集」▽五十嵐忠孝 (9月29日～10月13日) インドネシア「インドネシアにおける在来暦法に関する調査」▽山田勇 (10月3～19日) 中国「環ヒマラヤ広域圏における社会と生態資源利用に関する調査」▽阿部茂行 (10月7～12日) アメリカ合衆国「Asian Economic Papers Meeting に出席」▽阿部茂行 (10月28～30日) タイ「International Conference on Economic Recovery and Reform に出席」▽柳澤雅之 (10月31日～2003年10月8日) タイ「バンコク連絡事務所管理運営」

研究会報告

◆International Workshop on "Inter-Ethnic Relations in the Making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China under 'Globalization'"

10月29日 Aroonrut Wichienkeo (センター外国人研究員) Land Management in Ancient Lan Na Society: A Case of Paddy Field▽Yang Guang-yuan (雲南民族研究所) A Comparative Study of the Sacrificial Rites Held by the Minority Nationalities in Xinning Country: A Case Study of the Yi, the Hani and the Dai Nationalities▽Hasegawa Kiyoshi (文教大学) Restoration of Rituals and Dai Identity in Sipsong Panna, Yunnan Province▽Hjorleifur Jonsson (アリゾナ州立大学) National Assemblies: Ethnic Minorities in Thailand's Museums▽Yuan Yan (雲南師範大学) Approaching Protection and Utilization of Language and Culture of Xiandao from Phenomena of Global Dying Languages and Culture

10月30日 Hayami Yoko (センター) Hills and Plains in Mainland Southeast Asia from the Perspective of Religious Dynamics▽Liu Jingrong (雲南民族研究所) Traditional Culture of the Lahu under the Globalization▽Baba Yuji (三重県立看護大学) Tai-Lue Migration and Changing Spirit Cult: In the Context of Nation-State in Recent Transnational Movement▽Hayashi Yukio (センター) Theravada Buddhist Practices across Regional Boundaries

◆Special Seminar

6月6日 Hong Liu (センター外国人研究員) New Migrants and the Revival of Overseas Chinese Nationalism: The Southeast Asian Experience Revisited; Wu Xiao An (同) Power and Business: Chinese Business Networks in the Penang-Kedah Axis, 1880s-1910s▽7月5日 Charles Macdonald (同) *Urug*: An Anthropological Research on Suicide in Palawan, Philippines▽7月8日 Bin Wong (カリフォルニア大学) Dynamics of State Transformations in Southeast and Northeast Asia▽7月11日 Aroonrut Wichienkeo (センター外国人研究員) The Forest in Northern Thailand According to Palm-leaf Texts in Early 18th Century▽9月12日 Rigoberto Tiglao (同) Reviewing the "Philippine Republic" Notion▽9月30日 Shamsul Amri Baharuddin (マレーシア国民大学) Your Guess Is as Good as Mine!: Post Mahathir Malaysia

◆「東南アジアの社会と文化」研究会

第8回: 5月17日 土佐桂子 (神戸大学) 『『開発』と『労働』——カレン州の僧侶の活動から』

第9回: 9月20日 福浦厚子 (滋賀大学) 「道教からみた宗教の再編——シンガポールにおける文化の客体化について」

◆「国家・市場・共同体」研究会

5月31日 矢野剛 (徳島大学) Leading Bias, Financial Reform and Some Policy Devise: Using Micro Data for Wuxi City from 1993-1996

6月28日 Edmund Terence Gomez (マラヤ大学) Transnationalism, Enterprise Development and Identity Formation: Malaysian Chinese Business in Local and Global Contexts

7月5日 安場保吉 (大阪学院大学) 「東アジア・東南アジアにおける借用技術と技術進歩」

7月9日 Thomas Lindblad (ライデン大学) Is There a Future for Japanese Investment in Indonesia?

10月18日 M. Husein Sawit (インドネシア食糧調達庁、Bulog) Structural Adjustment and Rice Policy Change in Indonesia: Its Implication for Food Security and Rural Development

◆「ビルマ研究会」6月6日

藤田幸一 (センター) 「ミャンマー農村調査報告(1)——金融を軸に」

◆「環ヒマラヤ研究会」7月24日

平田昌弘 (センター) 「乳加工体系から見た環ヒマラヤ地域圏における地域間比較——チベット牧畜民の位置づけ」

◆「東南アジア大陸山地部研究会」9月18日

深尾葉子 (大阪外国語大学) 「ゴムが変えた盆地世界——雲南・シーサンパンナの漢族移民とその周辺」

◆「東南アジアの自然と農業」研究会

第106回例会: 6月28日 山田みちる (北海道大学) 「フィリピンビコール地方における総合農協の存立条件と役割」

第107回例会: 10月11日 横山 智 (筑波大学) 「ラオス北部山岳地域の存立基盤」

◆"Asian Public Intellectuals Seminar" 9月4日

Mary John Mananzanan (API シニア・フェロー) Commitment to Empowering Women ▽ Pateep Methakunavudhi (同) The Comparative Study of the Ethical Awareness Related to Information Technology Security Issues between Japanese and Thais▽Allan Jose Villarante (API ジュニア・フェロー) In Defense of the Shonen-Shido-Seido: An Analysis from a Holistic Perspective

青山 亨

ジャカルタ連絡事務所に入って7カ月が過ぎた。客員という身分で事務所の運営を任されたが、この間、それなりに事務所の問題点も見えてきたように思う。外からの目から見誤りもあるかもしれないが、今後の事務所のあり方について少し述べてみたい。すでにニューズレター45号と46号の「バンコク事務所だより」で提言されていることだが、21世紀COEプロジェクトの始動にともない、連絡事務所のあり方も転換期にある。ジャカルタ連絡事務所は「情報交流や資料収集、ロジスティックサポートの拠点であり、複数のプロジェクトが相互乗り入れして利用する」「定着型」オフィスと規定されているが、今後どのような方向に向かうのだろうか。一つの可能性を探ってみたい。

まず今後の発展の前提となるのは、事務所の現地法人化であろう。これなくしては、事務所の表に看板を出すことさえはばかれるのが現状である。法人化の手続き自体もさることながら、法人化後の納税処理などクリアすべき課題は多々あろうが、法人化なくしてはジャカルタにおいて事務所の存在を広く認知してもらうことは不可能である。

法人化にともない、事務所の「オフィス」機能と「駐在員自宅」機能は当然分離されなければならない。オフィスは会議室、図書室、作業室などをもち、セミナー、ワークショップなどが開催できる場としたい。これだけの空間を確保するにはオフィス・ビルの一角を借りることも考慮されよう。法人化した事務所は、センターの専用物とするのではなく、広く内外の研究者一般に開かれた場となることが望ましい。言うなれば、インドネシア研究のポータル（門）である。

オフィスを維持するためにはインドネシア人職員の雇用も避けられない。また、彼らによって、これまでセンター教官に任されてきた資料収集の作業も可能なはずである。センターとの間にヴァーチャルLANを構築し、ネットワーク的に事務所とセンターが一体化すれば、資料の書誌情報の登録はすべてジャカルタですませることができ、人件費の節約になる。また、現在、東南アジアの現地資料の収集はセンターやアジア経済研究所（やがて国会図書館関西館も）がおこなっているが、財源の効率的な利用を考えれば、今後、何らかの分担は必至であろう。

法人化によりオフィスがそれなりの構えを持つようになれば、かえって敷居が高くなるおそれもある。しかし、法人化によってより広く開かれたオフィスになることのメリットは、デメリットを補って余りあると思われる。むろん、オフィスと駐在員自宅の分離は、財政的にさらに大きな負担を強いることになるが、何とかセンターにはやって欲しいものである。その上で、新しいオフィスにも自宅兼事務所の時代のアットホームな雰囲気も残したいものだと言え、贅沢であろうか。（センター客員部門教授）

白石 隆

7月2日から10月1日までちょうど三カ月、バンコク連絡事務所へ赴任した。折から日本・アセアン経済連携、中国・アセアン自由貿易地域などの地域主義的イニシアティブが話題となっていたこともあり、この機会にかなり系統的にタイの政府要人、企業経営者、大学・研究所の研究者などに、この問題についてインタビューを行った。また9月25日にはチュラロンコン大学でアジア研究所の主催でこの問題につきスリン元外相ほかとセミナーを行った。（なおこのセミナーでわたしの行った報告については、タイの英字紙 *The Nation*、9月30日号掲載の Kavi Chongkittavorn のコラム、*Japan's Dilemma: defining its role in Asia* にかかなり大きく紹介されている。）以下、こうしたインタビュー、セミナーで学んだことを二点、ごく簡単に記しておきたい。

その一つは「中国」ということである。日本と同様、「中国の擡頭」はタイでも大いにその意義が論議されている。しかし、タイで人々が「中国」というとき、この「中国」は、必ずしも日本でわれわれが「中国」というときの

連絡事務所だより

「中国」と同じではない。われわれは「中国」ということで上海、広東など中国沿海地域を考える。これに対し、タイでは、「中国」ということでしばしば雲南が考えられている。つまり、メコン河で結ばれた雲南から東北タイ、ラオスを経てカンボジア、ベトナムにいたる地域をひとつの潜在的な経済圏と想定し、そのなかで「中国」への投資、ラオスとの経済協力、東北タイの経済開発などを考えようとする。

もう一つは、タク・シン政権の政策決定のやり方である。対中政策、対日政策を含め、現政権の意志決定はタク・シン首相に集中している。もちろんかれの回りに側近がいろいろ意見具申を行っているけれども、日本・タイ経済連携、中国・タイ自由貿易地域といった問題の利害得失を専門家にきちんと分析させているようには見えない。またCPほかのビジネス・グループが民間の立場から意見具申しているようにも見えない。

この二つを合わせるとこうなる。現政権は精力的に対中接近を図っている。しかし、これは東北タイ開発を念頭においたもので、製造業なども含めた中国・アセアン自由貿易協定全体の利害得失についてはまだきちんとした計算をしていない。その計算をしたとき、どうなるか、それがこれからの見どころである。（センター教授）

2002年11月1日発行

発行 〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町46
京都大学東南アジア研究センター
Tel (075) 753-7344
Fax (075) 753-7356
e-mail: editorial@ceas.kyoto-u.ac.jp
編集 水野 広祐・米沢真理子